

「龍源寺本堂参拝」のススメ



昨今、お寺を会場にしての葬儀と法事が増えております。自宅やセレモニーホールではなく、龍源寺を選択肢の中心に据えるのは様々な理由があるかと思いますが、年間通して檀信徒の九割はお寺を利用して現在の現状がでございます。こういった事情を踏まえまして、私たちとしてはよりいっそうの伽藍と境内の護持管理・普請に努めていかなければならないと考えております。檀信徒の皆様にとってより開かれたお寺を目指していきます。

ただ、お寺に檀信徒の来る機会が多いのは素晴らしいことなのですが、いま「お参り」ということがしっかりとできていないと思います。せっかく菩提寺に来ているわけですし、後述しますが龍源寺檀信徒のお宅のすべてのお仏壇は龍源寺の本尊さまと本堂の「代わり」のものです。日常にお参りしているお仏壇の本丸をお参りしないということはまさしく本末転倒な状態でございます。ということで今号におきましては「龍源寺本堂での参拝」ということにスポットを当ててみたいと思います。

龍源寺報

70号



お寺の中心
本尊さまです

本尊さまへの参拝

なんといつでもお寺の一番の中心は「本尊さま」です。本尊さまへのお参りがお寺にきたらまずなすべきことになります。龍源寺の本尊さまは「釈迦牟尼仏世尊」、略した名称は「釈尊」、いわゆるお釈迦さまのことです。私たち曹洞宗においては、お釈迦さまを本尊さまにすえる寺院がかなりの割合を示します。逆をいえば本尊さまがお釈迦さまでない場合は、他宗派だつたお寺が過去に曹洞宗に改宗された場合もあります。

曹洞宗は地方への展開が著しい宗派ですが、現地にあるお寺の様々な状況（廃寺同然の状態など）のところに曹洞宗の僧侶が入り、改宗して存続していった例もたくさんございます。

禅宗においては仏教の開

集落お堂の「仏像盗難」に注意！

この度、地元曹洞宗青年会の事業で「妻有百三十三番霊場紀行」という冊子を作るはこびとなり、会員それぞれ各地を回っているのですが、本尊さまの盗難被害が目立っています。各集落の人にもお話を伺っているのですが、集落の方々も困っています。

今回の事業は当初、「巡礼しやすい霊場の環境作り」を目指していましたが、この盗難被害を受けて「開かれた霊場」を目指すことが困難な状況であることがわかりました。善意が前提でお参りしやすいように鍵をかけていない霊場もあるので、とても残念な気持ちになります。

皆様も今一度集落で管理しているお堂や公民館に安置されている本尊さまに目をむけていただき、大切にしていただきたいと思っています。調べていると江戸時代からのものもあれば、鎌倉・室町時代からと伝わっているという本尊さまもあります。各集落の文化財ともいえるものばかりだと思いますので、力を合わせて大切にしていただきたいと思っています。

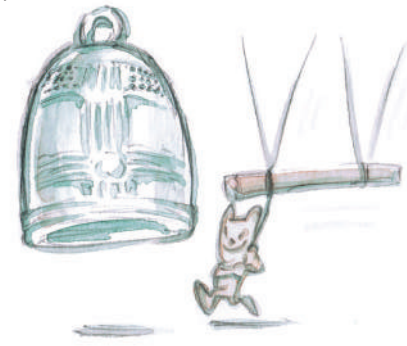
龍源寺・龍昌寺合同主催

大本山総持寺650回
大遠忌参拝団募集

11月11日～13日（水・木・金）

前号にてお知らせした新潟県第一宗務所主催大本山総持寺参拝が、好評につき定員いっぱいになりました。ありがとうございました。

まだまだ旅行に行きたいという声があったので、龍源寺末・龍昌寺さまと合同での参拝旅行を企画いたしました。別紙にて詳細な内容をご紹介しますのでご覧いただきたいと思います。参加希望の方は龍源寺まで御一報お願いします。

龍源寺
7～12月の諸行事案内

毎月第1・第3日曜朝五時より
暁天坐禅会（11月まで）

7月25日	地藏観音祭
8月7日	山門大施食会 九時半より食事 （お寺の精進料理） 十時半より施食会法要
8月13日	山門盂蘭盆会
8月14・15日	新盆棚経
9月20～26日	秋季彼岸会
11月11～13日	本山参拝旅行
12月8日	釈尊成道会
12月31日	除夜の鐘 （明朝元朝大祈禱）

檀信徒の皆様の
たくさんのご参加、お待ちしております。

編集発行

深見山

龍源寺

〒949-8311 新潟県中魚沼郡津南町中深見乙1118番地甲
☎(025) 765-3055 <http://www.shinkenzan.com>

祖であるお釈迦さまが大切にされ、お釈迦さまの坐禅を尊びます。そして、そこから展開された仏法が大切なわけでございますので、他宗派以上にお釈迦さまそのものへの意識と、お釈迦さまが実際に行った坐禅という行への意識が強いのです。お釈迦さまご自身のことについては今後も事あるごとに紹介をしていきたいと思えます。脇侍は摩訶迦葉尊者（むかつて右）と阿南尊者（むかつて左）。いずれもお釈迦さまの十代弟子で、お三方とも二千五百年前に実在した方々をまつているのが禅宗の特徴です。もちろんこの釈迦三尊というのは脇侍が文殊菩薩と普賢菩薩の場合もございますので全部が全部ではございませんが、龍源寺のような形態が曹洞宗においては多いようございます。

本尊さまへの参拝の意味合いは「挨拶」、「祈り、誓い、願いを捧げる」、「本尊さまに面とむかつて手を合わせ、頭を垂れることで、我から離れる、いわゆる無我」、などいろいろあるかと思いますが、それぞれの「心」が如実にあらわれるのが

皆様のお宅のお仏壇は 菩提寺の本堂

このようにお寺での参拝の説明をさせていただきましたが、なぜこのように「意味合い」をもたせた説明をしたかというと、現代の人が行為に意味をもたせる傾向があるからです。意味がないと「やらない」んですね。確かにそれぞれに意味はあるわけですが、参拝は自分自身の心と向き合うことにも直結していきます。それでは自分自身が存在する「意味」とは？などというふうに飛躍してしましますが、自分の他には意味をもたせたがる割には自分そのものをおろそかにしているようにも感じます。

少し前述しましたが、お仏壇は菩提寺なのです。菩提寺の住職が必ず開眼法要を行うのもこういうことですね。お仏壇の本尊さまは龍源寺の本尊さまであり、お仏壇にまつる先祖さまは菩提寺の位牌堂においてもまつら

この本尊さまへのお参りという行為に他ならないと思います。「手を合わせ、礼をする」この行為自体、自分自身の心と向き合うことにつながると私自身は常々思っています。おのずと自分の存在そのものに対する謙虚な心を生み出すものだともいえます。



位牌堂での参拝

本尊さまへのお参りが終わったら位牌堂での参拝です。この前後にオビゾル様と妻有霊場の聖観世音菩薩さまにお参りされる方もたくさんございます。位牌堂には位牌堂の本尊さまとして地藏菩薩さまがまつられ、お寺に安置する「寺位牌」のある方々はお地藏さまへのお参りのあとにそれぞれの位牌の前でも手を合わせます。

位牌を上げていないから位牌堂へ参拝する必要がないと思う方もいらつしやるかもしれませんが、とてもない間違いで、龍源寺の檀信徒として葬儀をされた仏さまの紙位牌がすべてお地藏さまの脚下に安置されています。ということは、龍源寺檀信徒すべての仏さまが位牌堂にはまつられているのです。葬儀のあとの初七日法要（棚送り）や年回忌供養（塔婆書き供養）がここで営まれるのは皆さまご存知の通りですが、このように意味があるわけです。

位牌堂の本尊さまであるお地藏さまと自分のご先祖さまがたへのお参りになりますが、ここでの参拝の意味合いは「先祖代々の冥福を祈る」、「誓いや自らの現状報告」などなどいろいろあるかと思えます。現代では長生き・大往生ということが普通になっている感はないかもしれませんが、人間の寿命や亡くなり方、あるいは亡くなった方と自分のつながり方もいろいろございますので、それぞれ「心」がやはり反映されるのではないのでしょうか。ただ、自分という

存在は親をはじめ、祖父母、そして先祖さまがたが生きてこられたから自分という存在があることは疑いのない事実でございますので、位牌堂での参拝は「感謝の念」も大切のように思います。それがまた自分自身と向き合うことにもつながるでしょう。



魚沼稲荷大明神祠土台補修工事 施主 小林一男 殿(割野)

龍源寺鎮守さま

この度、龍源寺の鎮守さまであります魚沼稲荷大明神を祀った祠の土台補修工事を行いました。この祠は龍源寺境内参道沿いにございます。檀信徒であります割野小林一男氏が施主を務めて下さいました。四百年以上の歴史をもつ伽藍と境内は常に補修普請が必要な状況でございます。龍源寺山内はもとより、龍源寺全檀信徒にとつて喜ばしいことであると思えます。誠にありがとうございました。曹洞宗ではその土地の神々を祀り、伽藍、境内の護持を願います。「明神」は神道の神様になりますが、日本のお稲荷さまは仏教の茶吉尼天の影響を受けているとも言われます。「神人化度」といい、お寺の住職が皆様の葬儀にも行われる授戒を土地の神々にも行い、仏教に帰依して仏教徒となつたうえでお寺の守護神として祀られています。でありますので、お稲荷さまも龍源寺の檀信徒のご先祖さまと同様に御血脈を護持しています。このようにお寺ではいまだに神仏習合の形態がとられているのです。これからお稲荷さまを大切にお祀りしていきたいと思えます。



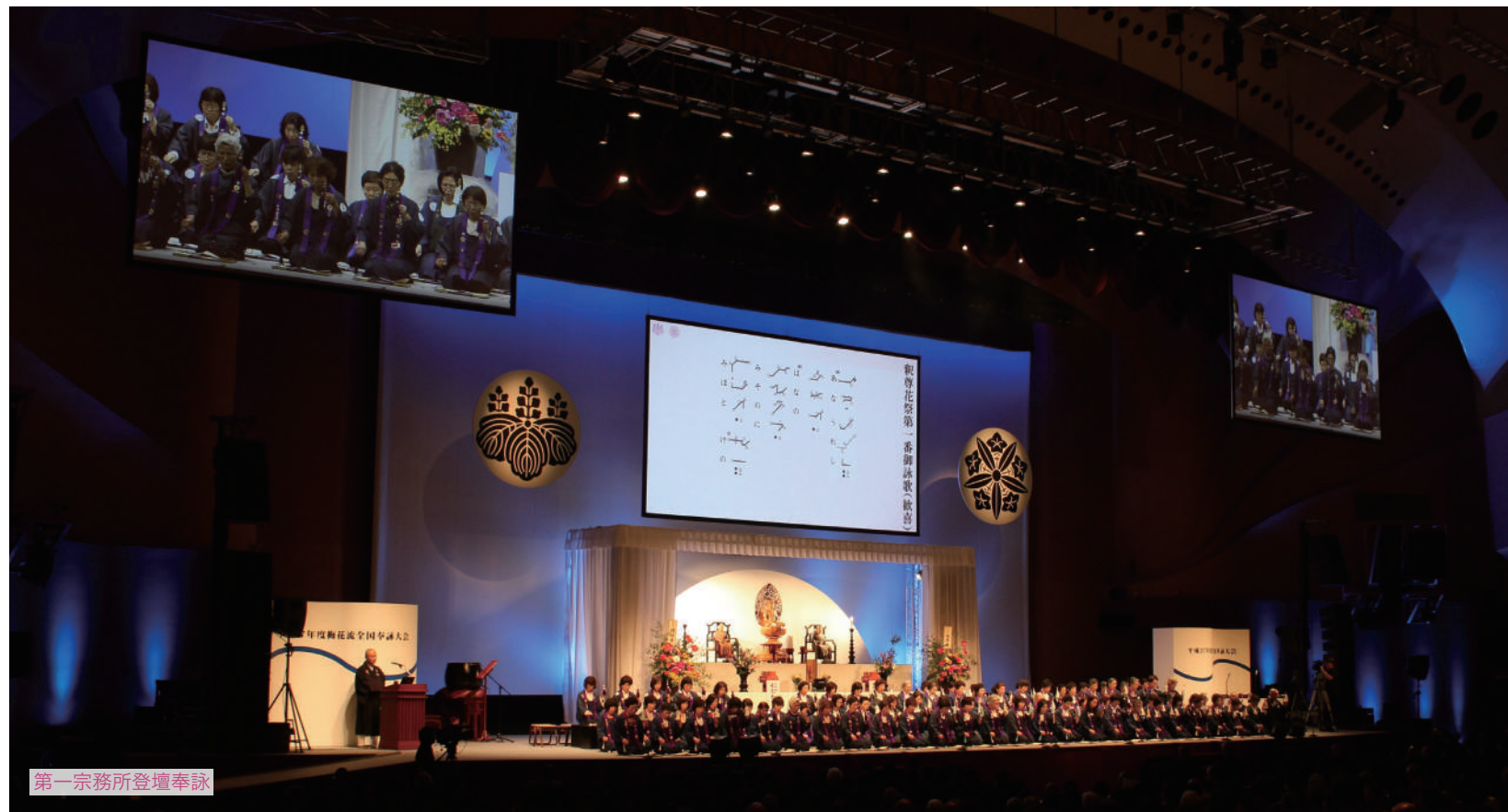
梅花流全国奉詠

パシフィコ横浜大会レポート

2015,05,27

曹洞宗の梅花流御詠歌は、毎年必ず全国大会が行われています。今年は神奈川県横浜市において開催されました。会場はパシフィコ横浜。五月二十七日の開催に龍源寺梅花講からは八名の参加でした。皆様お疲れ様でした。

大会は海のすぐそばにある会場でした。全国から各地の梅花講が集まり、両大本山の禅師さまも見えになる非常に大規模な曹洞宗の行事です。大会という名称でございいますが、御詠歌を競うわけではなく、各地の梅花講ごとの御詠歌の披露が大会の主な内容になります。今年は大本山総持寺二祖さま六五〇回大遠忌の年ですので、大遠忌にちなんだ各種催しものもございました。横浜ということで中国獅子舞の披露や、総持寺がかつてあった能登半島の御陣乗太鼓、サンドアイティストの飯面雅子氏による二祖さまのサンドアートなど、盛りだくさんの内容でございました。



第一宗務所登壇奉詠



3日目 武田神社

大会翌日は山梨県の富士山の見える旅館で宿泊のあと忍野八海へ。名水百選にも選ばれている湧き水はとても澄んでいてきれいでした。そして十日町市出身の岡田紅陽写真美術館へ。十日町市円通寺さまの縁者ということで様々なお話しも聞かせていただきました。富士山の写真で有名な方ですが、関東大震災の震災後の写真撮影が有名にな

グリコピア・イーストでポッキーやブリッツの製造工程の見学もさせていただきました。

大会の前日と翌日には各地の観光、前日の埼玉では埼玉日光の異名で知られる聖天山歓喜院さまへ。近年国宝に指定された拝殿などを参拝させていただきました。日光東照宮の職人たちの子孫によって彫られた彫刻は圧巻でした。東照宮から百年後の建物ということで技術力の向上が見られるのと、これだけのものを時の権力者ではなく周辺の住民信徒さんの浄財によって建立されたというのが国宝に指定された理由とのことでした。そのあとは



龍源寺梅花講



2日目 パシフィコ横浜



国宝・拝殿



1日目 聖天山歓喜院

られたきつかけとのことでした。そして山梨といえば武田信玄公ですが、その信玄公が祀られている武田神社へ。武田家の躰躰ヶ崎館跡に建てられたこの神社は意外にも近年の建立で大正時代とのこと。越後の上杉家との十二年に及ぶ川中島の戦いでもおなじみの武田家ですが織田家に滅ぼされてしまっていますので、上杉家とはまた違った道を歩んでいたことに感慨深いものがありました。

以上、簡単なレポートでしたが、御詠歌の大会は毎年開催されます。梅花講の皆様、来年のご参加もお待ちしております。そして現在、龍源寺梅花講では新しい講員さんを募集しています。日々の御詠歌のお稽古だけではなく、御詠歌が縁となつて様々なお寺の行事にも参加できるのも御詠歌の魅力だと思えます。興味のある方は龍源寺まで御一報ください。

曹洞宗で読誦される御経

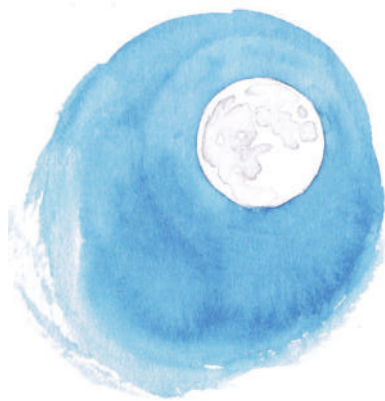
まとめ

これまで寺報六十三号から七回にわたって曹洞宗において読誦される御経を紹介してまいりました。檀信徒の皆様が日常耳にすることが多いものを中心に紹介してまいりましたので、実際はこれら以上にたくさん御経を私たちは各種法要によって読みます。「参同契」「宝鏡三昧」などの相録（歴代の禅僧たちが示した禅に関する書物）や「仏遺教経」、各種御真言、各種陀羅尼、各種偈文など、とにかくたくさんあります。

私たち禅宗は特定の經典を中心に据えないので、いろいろな經典を用います。しかし禅宗においてはあくまでも御経というのは月（真理）を指し示す指（經典など様々な仏教の教え）にすぎないと考えます。私たちはやはり坐禅に全てが集約されていきます。お釈迦さまの坐禅による悟りから仏の教えは始まるわけですから、あくまでもその根本の坐禅を「実際に行ずる」ことが何よりも重要視されます。ぜひ龍源寺の坐禅会等に参加していただいて檀信徒の皆様にも坐禅を経験していただきたいと思っています。

この連載を始めるきっかけは二つありました。一つは私副住職が修行から帰ってきてから挨拶の意味と現住職の晋山結制への寄付のお願いで檀信徒の自宅の赴きお仏壇で般若心経を読経して回っていた際、あるお宅でいまの法要の意味を知りたいという意見があったこと。二つ目は学生時代のある先輩が他の宗教に比べて仏教の御経は昔の言葉だから内容がわかりづらいという意見をもらったこと。その都度そういう疑問には私なりに答えるわけですが、潜在的に同じように考えている人はたくさんいるのではないかと思います。寺報への連載につながりました。私自身の勉強の意味もありましたし、經典の専門家・研究家でもないですのだから大雑把な説明ではごさいました。が、だいたいどんなものかわかっていただけならという考えで紹介してまいりました。いざれここから発展して各種法要の意味合いの紹介もできたらと考えています。

連載を見ていただいた方々の中にはお気づきの方もありませんが、御経には死者の冥福を祈ることと同時に生者へのメッセージも含まれています。仏教における葬儀や法事が、生ける者たちと死せる者たちとすべてを含んだうえで行じられているというふうに見点を変えてみると、法要に向かう姿勢も変わってくるかもしれません。ご拝読、ありがとうございます。



言の葉の叢

第11回

曹洞宗の大学であります東京世田谷区にある駒澤大学の理念に「行学一如」というものがあります。修行と修学、実践と学問・研究は一体のものであり、互いが互いを離れてあるものではないというような意味です。学びと実際の行動を分けては考えないのです。

ある深層心理学者の本を読んでいたら、西洋思想はキリスト教などの一神教が根本にあつて、神と自分を分けて考える、そこから物事を分化して考えていく、それが今日の科学の発展につながったわけですが、東洋思想、仏教もこの中に含まれる場合もあるかと思ひますが、多神教的世界観（仏教は無神論的な考え方もあります）は物事すべてを一つのものとしてみる、あるいは一つのつながりに集約していく特徴があるそうです。そこにはそれぞれの「調和」という重要性もあるわけですが、日本人の心の問題を考えた場合、西洋と日本の文化の違いに注目しなければならぬということ。文化の違いの根本は宗教性の違いで、今日の日本人はあまり意識しないかもしれませんが、多分に宗教的な感性というのを抜きには捉えることができないということです。これは一如（二つの如し）という言葉の理解につながると思います。

話は横道にそれまし

行学一如と知行合一



だが、この行学一如の精神は現代を生きる私たちに大切なメッセージを与えてくれているように思います。ともすれば頭でっかちになりがちなのが現代人ではないでしょうか？情報は溢れ、知識に頼りすぎているのではないかと？その知性には行動が伴わなければ果たしてその知は真に意味のあるものなのか？いろいろ考えさせられる言葉です。行と学の根本には「心」がなければいけない、これも忘れてはいけないように感じます。物事を一如とみる姿勢は私たち禅宗の教えの大切なところ。そしてこの行は「坐禅」の意もあるかと思ひますが、紙面の都合上、これ以上話を広げないでおこうと思います。

この精神に日頃から近いものがあるなど感じていたのは「知行合一」という言葉です。知ることと行うことは、同じ心の良知の作用であり、分けて考えるものではない、というのがこの言葉の意味です。いま大河ドラマの吉田松蔭の影響で有名になりつつある言葉かもしれません。この言葉は陽明学の教えであり、幕末の時代には志士たちが随分学んだ学問で明治維新の原動力の一つになったといっても過言ではないと思います。我が龍源寺の赤山義塾においても、高橋赤山先生は陽明学を修めていたので、この知行合一の精神は赤山義塾から国政や社会事業に携わる門人をたくさん輩出したことにつながったのではないかと考えています。いずれの方々も一生懸命学んで、実際の「行動」に移した方々で、やはりその根本には「志」の心が強くあつたように思います。陽明学は実践重視の学問ということで、私たちは禅宗における観念ではなく現実における実際の行の重視と通じるものがあると思ひます。

子供たちの学びにもこれらの言葉は大切であるかと思ひます。その学びに将来的な「行動」が伴ってくるように、そしてそれぞれにとっての「志」の芽が育つように。そのためには私たちの大人の生きた姿勢が一番の手本になってくるのは言うまでもありません。日本には「恥」の文化だとも言われています。恥ずかしい生き方を嫌うのです。今の日本人はどうでしょう？そして何が「恥」なのか？私自身も含め、それぞれがよくよく参究すべき課題のように思ひます。